冬暦

木俣修歌集

木俣修歌集

八雲書店

目次

冬暦

寒蟬 ……………… 一〇

野分 ……………… 一三

回想 ……………… 一六

ゆく秋 ……………… 二〇

ある浮彫 ……………… 二四

冬花 ……………… 二九

街 ……………… 三三

冬暦 ……………… 三八

けふのおもひ ……………… 四四

世代 ……………… 四九

人間 ……………… 五三

本郷 ……………… 五六

寒時雨……………………六〇
行路……………………六四
師走の眼……………………六八
凍夜吟……………………七三
冬日點描……………………七四
かなしき人々……………………七七
貌……………………八〇
市井……………………八四
村落抄……………………八七

芥

芥……………………九六
寒き春……………………九九
景物詩抄……………………一〇三

生……………………一〇六
いきほひ……………………一〇九
童女哀悼……………………一一二
表情……………………一一四
花ひと日……………………一一七
惜春吟……………………一一九
花束……………………一二三
暗き季節……………………一二六
青葉……………………一二九
世間譚……………………一三三
夏菊……………………一三六
夜景……………………一四〇
時……………………一四二
素描日々……………………一四六

塵層……………………一四九
海上……………………一五二
おもひで………………一五六
箴言……………………一五九
怒り……………………一六三
冢………………………一六六
機關區…………………一六九
炎天……………………一七五
二年は過ぎぬ…………一七八
斷章……………………一八〇
卷後小記………………一八四

冬暦（とうれき）

歌集

冬暦

寒蟬

夕雲にひびく寒蟬のひとつ聲おもひやうやく
秋にし入らむ

身がまへて蟋蟀をねらふ仔の猫よ秋草叢に日
ざしあまねく

颱風眼マリアナにあるこの夜(よは)を肌寒きまで蟲
が音(ね)ぞ冴ゆ

たのしけく玉蜀黍(たうきび)をもぐ吾子見ればなに嘆か
むやこの朝光(あさかげ)に

コスモスは瓦礫の間(ひま)に花そよぎ炊ぐひとゐて
バラックのうら

しづかなる秋日射せれば銹鐵の沈める溝もけ
さは明るし

かぐはしく麵麭の燒けゆく夕まぐれ無言歌の
うたを妻口ずさむ

かの瀨々を鮎はひといきに落ちゆかむ冷えつ
つくだるこの夜の雨に

野分

倒れたる群の墓石も曼珠沙華もただにかがやき丘の夕光（ゆふかげ）

曼珠沙華あわただしくもすたれゆきけふ荒涼と野分だつ小野

腹癒えし幼子が母にせまりつつなに欲るなら
む低きこゑして

そののちを知ることもなきかの陸(くが)の奥處(おくど)はす
でに雨冷ゆらむか

うで卵賣る前を過ぎこころさへ疲れはてつつ
夕の埃路

いきどほるこころもはらに歩み來て夜の街川の昏きとどろき

ひと向きに伏したる粟になほ吹きて音さわがしもひるの野分は

身にこもる激しきものの或る夜はかたちをかへていたくやさしも

回想

黒暗に手さぐるごとく生き來しを悔しみはてて今夜ねむらむ

あきらめの言葉むなしく吐きすてていくたりかまたけふも墮ちゆく

座標なき點のごとしとみづからをさげすみに
つつすべもなかりき

新しき型の飛行機の過ぎゆくを朝々に目守る
ひとりのおもひに

混迷のなかに佇ちつついくばくか僞惡者めき
て行ひしのみ

思ひ出のジプシーのうた響りいでてうかびく
る若かりし誰彼のかほ

おろかしきまでに貧しきかほ寄せてはつかな
る酒をかこむひととき

數しれぬ小型自動車たむろして傷痕もすでに
なき一區劃

北洋に果てしひとりと南海ゆかへらぬひとり
をともにしぬばな

激語しつついどみくるものを前にしてゐどゐ
どとありしわれもそのひとり

身につけし呪符も破らむいくとせの孤獨のゐ
もひゐひやらふべく

一

ゆく秋

幼子はあやしむごとく顔よせてにほふ木通(あけび)を
食はむともせず

あらあらしき疾風(はやち)のなかに夜明けつつなほ蟋
蟀のこゑはきこゆる

「家なき子」の註もかなしき寫眞にして襤褸のご
とくもいくたり眠る

なほ辛き明日をしぞ思へけさ讀みてロイター
通信の傳ふる文字よ

戒壇に坐すごとくありてこの夜のおもひしづ
かに徹らむとする

いくたびか蜻蛉(やんま)を捕れとすがり來て幼子はけふもわれをさいなむ

神輿もむわらべのこゑよ燒原にこころゆくまで揉むとすらしも

書物も鍋も置き散らばれる部屋住みにおもひ卑屈におちゆくなかれ

逃げのびて山窩のむれに居るらめと涙たたへ
ていひしひとこと

山なかの部落のごともしづまりて夜の灯
る丘のバラック

一

ある浮彫

甲(よろ)ひゐるこころもつひにかなしきか遠木枯を
夜(よは)にきくとき

背の骨のまがるまでの荷を負ひあゆみ祈りす
らなし沒日(いりひ)のなかに、

地平の果もわが佇つ丘もさばかるるもののごと鎮み冬の落日

無頼の街の冬ともしびよおもおもと駄馬の蹄の音ぞ過ぎゆく

骨だつは頬(ほほ)のみならず日のくらし夜のおもひの乾びゆくとき

擦り放つ燐寸(マチ)の火焔(はむら)は枯羊齒にうつらむとし
て寂しき音す

芥なすものなにくれと集め來てけものめきゆ
く冬のいとなみ

冬の日のかがやくときに石段(いしきだ)のみ殘る廢墟の
凜々(りり)とうつくし

渡來せしギヤマンの皿祕めもちてなに嘆きけ
むいにしへびとは

神々の沼(ぬ)の水を汲む浮彫(レリーフ)がかぎりなくやさし
寒き灯のもと

のちの世のさばきを待てといふ言葉木枯のこ
ゑのごともわびしも

板敷に身をこすりつけきざし來るものを虐ぐ
とその獄にして

獄中記のなかに狂ほしく日のひかり戀ふると
ころありてわがおもひ沁む

いくたりの人は訪ひ來てかそかなるわれをこ
ころむきのぶもけふも

冬花

無垢の日の思ひぞかへれ冷えこごる柊のはな
にほふこの道

地の果をひらめき過がふ雲すらも迫む如（な）すけ
ふを生くるおもひに

柊の花の香こめて霜ぐもり地（つち）にあまねきけふ
のひる過ぎ

荒寥と瓦礫みだるる焼跡も冬すでに八つ手の
花を咲かしむ

枯れ伏しし草なかにいくつ十字架（クルス）光ればここ
ろゆらぎて墓地添ひのみち

いくたびか時雨のあめに洗はれて氷のごと冴
ゆる庭の砂石

寒風がなかに賣れれば根山葵の濡れたるいろ
の沁むがにきよく

海外のともをすくへとなほ叫ぶ時雨るる街の
夕くらがりに

やうやくに地におちつく黄落葉が朝々の霜深
くしなりて

柊の花とほくにほへる夜の道に霜凝りゆきて
ひびきすらなし。

街

留置場を破りしものら潜めつつ時雨はくだる
暗き夜のまち

梱包を護衛のなかに積み了へしトラックあり
て寒き夕河岸

焼原の冬日に移る葬列をあわただしくもわれは寂しむ

八つ手の花をきり刻み皿に盛りてをり幼子はかくてひとときを遊ばむ

迷彩をまだ保つ屋根がいたいたし木枯のなか夕づくまちに

冬のひかりとなりし焼跡電柱に貼れるポスターの朱(しゆ)も寒きかも

賭けごとをする少年らかがまれりうすく冬日の光(て)る路のうへ

硝子なき冬教室よ幼ならは素首寒らに音讀をせり

獸肉を鉤吊りしたる燒跡の小店を染めてけふ
の沒日も

丘占めて建ちたる家は樂の音も會話のこゑも
夜にはなやぐ

バラックの裏を來しとき居られむとする鷄の
こゑはするどし

少年の掏摸がひかれゆきし騒ぎなどつかの間にして市のひとごみ

濠沿ひはやうやく點きし街燈にこの夜光り見ゆ時雨のあめは

冬暦

無盡數のなやみのなかにあがくさへけふのつたなきわれが生きざま

無爲のごと默みてのみにけふありて明日さへひらくおもひともなし

白髪薄夕日に燃ゆる莊嚴を息つめてみつつすべもあらめや

骨肉をわけたるもののすさまじきあらがひすらもきかねばならぬ

冬の日が審判のごとも頽れたる家の礎石にま澄むひととき

通魔(とほりま)のごとくおそひきと言ふきけば晝さへ怖(お)
ぢてその燒木原

まぶしきまで黄のセーターはかがやきてカメ
ラの前に佇つ幼子よ

見るものにわきて寂しき日暦(ひこよみ)よ聲もなくして
冬を生きつつ

いづくよりともなく來る水は灰燼にしみわた
りゆき音さへもなし

ひたぶるに地も空もくらき夜にしてその慘忍
は遂げにけむかも

あさましとさもしとこころ悲しめど餓鬼とも
なりて齒を鳴らすいまも

こころ粧ひて混沌のなかをゆくことも八十日
百日と經れば苦しも

黑暗の道ひたぶるにつききり來てこの夜せつ
せつとわがいのち愛し

とらはれの冬ふたたびを凍悲のひかりに嘆く
きみをしぞ思へ

片隅の古典のうへにたまりたる塵を吹きなどしつつ冬の日

そぐはざる服着くるごとさびしみて直譯の文字をけふたどるかも

けふのおもひ

壁面(へきめん)の古地圖(こちづ)をはがすけふのおもひさむざむ
としてなにににつながる

生(しやう)終へし蜻蛉(あきつ)の翅はひかりつつ落葉のうへに
いく日(ひ)保たむ

凛々として感傷をさそふ冬虹も燒原の果にや
がてほろびむ

炭やきのそなへはなりてこの苑(その)に煙ぞこもる
寒き夜すがら

忘却のかなたにありと應(こた)へつつまざと苦しみ
をしめすその貌(かほ)

文獻にささへられたる論ひとつ書き了へてけ
ふのこころあやふし

峻烈の言葉にひそむふくみなど思ふも果敢な
と言ふこゑぞする

おもひなほ古きに執つきてゆくごときあやふさ
のなかにけふもたゆたふ

わがこころ遊ぶことなき夜々（よひよひ）に「林檎の唄」は聞
えくるかも

憎しみをあらはに出さぬにくしみの言葉用ひ
て弱きこころよ

酒氣を帶びて刀（たう）を拔きたる貌ひとつ泥のごと
くあり記憶のなかに

酔ひ痴れて夜の壘にらちもなく身に負ふ悲し
みを發(あば)きゆきにき

世代

妥協なきあらがひの聲は刻々にたかまりゆきて夜のひと部屋

酷薄の掟のなかに支へ來しかのいとなみを忘るることなし

世代はうつらむとして新しき組織のなかのをとめらの聲

裸火はあかあかと燃ゆゼネストのいくたりが
夜を占むる家のまへ

燭光寒き窗々にひとの影ゆらぎ爭議第二日も
夜(よは)となりゆく

リーダーのこゑにしたがひてうたふ歌赤き旗
も波のごとくに搖るる

ひと夜寢しけさも聞えてゼネストを遂げむと
ぞするひたむきのこゑ

身に徹るものはきびしも冬の夜の雲高くあり
て凝（こご）りゆくとき

人間

舌たるく交す會話よをとめらはなべて平凡を
好むことなし

人も駄馬も寒くまたたき夕霧に濡れゆく街に
さきはひもなし

遁（のが）れゆく途（みち）にはぐれし父母（ちちはは）をまた言ふなくて
そのみなし兒（ど）は

みなし兒はみなし兒どちとむつみつつ石を蹴
りあそぶ寒き路上に

鷄（とり）の骨小さく刻みて賣る店も寒きゆふべの飾窗（ウインド）
明（あか）く

いく桁の數字示しつつカロリーのこと說く香
具師も疲れたらしも

ひげ白きFortune-tellerに歩み寄れる進駐兵はな
にきくらむか

せる聲の甲高くして襤褸市はこの短日を賣り
いそぐらし

着古(ふる)しの産衣(うぶぎ)の類も賣られゐて冬日とどかぬ
路地の店さき

をとめらが荒(すさ)みのはてにえらびゆく新しきみ
ちといふもかなしも

本郷

マーシャルの書もヒルティーの書も冬の日に
背をさらしここの路の上の書肆(しよし)

公孫樹落葉かがやく苑(その)にいたいたしく戰歿學
生をなげくひとときに

學統にメスかざす若き世代のころは疾風(はやち)のご
ともきこゆる

エルテリズムをためらひもなく突放しなにに
たたかふこの若きらは

團子坂の冬の沒日(いりひ)は燒けのこる鷗外の像にい
ま莊嚴す

默示如す鷗外の像見て佇ちてひた寒し丘の燒原のみち

明治の世も大正の世もなべてとほし觀潮樓の跡に佇ちておもへば

憑かるるごときその表情よ人も人も驛のホームに夕刊を讀みて

木煉瓦露出する道の時雨れつつ湯島の坂のくらきともしび

お茶の水の渓に寒く降る夜の時雨電車のあかりとどくことなく

寒時雨

聖處女は鐘ひびくとき身を伏せていのりを捧
ぐけふのゆふべも

幼子は鮭のはらごのひと粒をまなこつむりて
呑みくだしたり

寒夜いま電熱のうへにたぎち來む湯を待つ妻
も子もいねたれば

昨日(きぞ)の日にひとくびられし草(くさ)なかにこの夜し
んしんと降る寒時雨(さむしぐれ)

富籤を買ふひとの長き列が占めて午前九時す
ぎの霜どけの道

憲兵隊のあとゝとし言へり土のうへに冬のキャ
ベツははじけてゐたり

トラックが幾臺も街に入る音す食料をめぐる
よろこびあらむ

學校に行くをきらふは何ゆゑとけさも幼童に
せまりゐるこゑ

ガダルカナルより生き還り來てネフリュードフのごとき嘆きにただよへる一人(ひとり)

山鳥も鴨も賣れれどその値(あたひ)近よりてわれのきくこともなし

貨物車に牛馬(うしうま)のごと運ばれしその冬の夜を轉期となしぬ

行路

七年の忌の香をたく亡き父が知らしたまはぬ
妻と子を率て

わが父がみまかりしよりの六年よ富みし思ひ
出のひとつだになし

まどかなる日とてなかりし六年をおもふけふ
さへわが怒りやまず

ややくにようはひ老けつなほ惑ふわが生きざ
まをあはれませたまへ

亡き父の寫眞の前に坐りつつ危ふきこころと
どめむとしき

泥炭のいぶるにほひも菜を刻む音も貧しく宵のひととき

足袋もはかず外に出でゆきし幼子に執しつつ寒くひるすぎし部屋

痛烈にひとをののしれりわが弱氣の極まらむとしてけふのゆふべも

縋り來るもののもうとからずわが一生(ひとよ)やや定まるとおもふあけくれ

戰歿の教子のうへをまた思ふ立ち直るわがけふのおもひに

師走の限

地下食堂の順番を待つ一列は夕の時雨に濡れつつ佇てり

停電の電車をくだり歩みゆく師走の風の鳴るくらき坂

霜ぐもり一日(ひとひ)はれねば河岸に寄る海鳥のこゑ
寒くみだるる

「少年靴工の眼はかがやくかプラタヌスの落葉」
厚らに敷く道に坐(ゐ)て

バラックをぬりゆく塗料にほひたつ短日の寒
きゆふかがやきに

クリスマスセールの樂は地下道を出で來しと
きに降るごときこゆ

塗装なりし三階の窗に日もすがら異國少女の
こゑぞひびかふ

はやはやも屋臺をたたむ夕の市鋪道のくもり
とみに寒けく

夜々の霜をはじきて伸びゆくか冬の小草のひとかたまりは

山原に狐を飼ふとつげて來し友ありてけふの冴ゆる寒空

進駐軍の放送は折々萬歲のごとき會話をして進行す

凍夜吟

いさぎよく冷え來る土よ枯草も冬萌草もそよぎをやめて

ともすれば覺むる寒夜(さむよ)の子がねむり風ひびく

窗に月は坐(ま)しつつ

さながらの瓦礫の丘も氷のごとく冴えつつ夜は
の霜くだりそむ

ものの影疊にこごる夜はにして鼠もひたと聲を
絶ちたり

軌道のうへにおく霜見せてこの夜はを車掌詰所
が放つ灯の幅

冬日點描

南天の實はくれなゐににほへれどここの燒跡
に來る鳥もなし

街上は中華茶館の灯(ひ)のみ冴ゆ木枯の音しづま
りゆきて

羽子板も紙凧も賣るゆゑ幼子は路上の店にあくがれやまず

この夜ふけ蠟を灯して起きゐつつ霜くだりつぐひびきも聽きぬ

高々と寒空過ふ爆音をいづちにゆくと思ふこともなし

父と母の骨(こつ)抱く遺兒がデッキにて冬日浴びゐ
るその大映(おほうつ)し

あわただしく夜(よは)の書齋より出でて來て行火(あんくわ)を
しらぶ幼子のため

はればれと羽子板を買ひて店を去る女士官を
見守りゐたり

かなしき人々

(一)

生きる屍といふ言葉さへこのけふのわが胸を
衝くものならなくに

諧謔を言ふゆとりすらなきまでに身を構ふこ
の悲しき人は

みなし兒の寢息ききつつ夜々にうら若き保姆
は嘆かふらむか

雪ふぶく墓地にもひとはゆき通ふそのかなし
みのつねならめやも

疎林越えてなほ雪原をいそぎゆく橇をまぼろ
しに見つつ嘆くかな

雪ぐもりくらき街上にあらはれて紙芝居屋が
鳴らすその笛

トロイカに運ばれてゆく囚虜らのなにいのり
けむ沒日のなかに

貌

假小屋の木組曝れたる燒原を見る見るとざし
霜折れの雲

霜折れのひと日のはてを街川に差し來る潮の
寒きいろ見つ

寒風のなかに荷を負ひゆく貌のなべてふてぶてと眼角光りて

地下道に夜を臥しものらはや起きて凍れる土に火を焚きはじむ

影のごとく集り來り浮浪者がなにか頒け合ひてまた散りゆけり

いくつの海を越えて負ひ來し荷のうへに眼(まなこ)を
おとし汝は言(こと)もなく

幼きものの墓をもてればかの陸(くが)を母親ゆゑに
永久(とは)に戀ふらめ

停電は今夜(こよひ)もつづき谷街はすでに音(おと)を絶つ寒
靄のなかに

刑果てしことをつたふる記事よみて霜明りある窗のひととき

市井

メチールを飲みて死にきときくゆふべ身を搖りて來るものは激しも

いくところにも斑雪はありてきさらぎのひかりしづけき宮邸の跡

雪積る窓のうちらにつつましく干鰯をあぶる
けふのゆふべも

豆ひとつなくて追儺の夜に坐(ゐ)つついからむと
するわがこころはも

得體しれぬ煙草吸ひつぎし夜の明けにゑぐき
咽喉をわが咳きやまず

言語革命をあげつらひつつ研究室の火もなき
卓にゆふべをむかふ

村落抄

一

葬(とむらひ)は鐃鈸(にようはち)鳴らし氷る田を見おろす峡を徐かに移る

にほひ來て醪わく香よ供出にからまる爭ひも
果てしこの村

谷の家のここも富みつつ隱居處を建て增す槌
の音をひびかす

間道の谷田づたひにけふも來て鷄を乞ふ闇商
人は

一貫目二圓の繭をなげきしをひとは傳說のごく傳ふる

山持ちのかの個人(ひとり)の稅いくばくとさまざまにいふ爐をかこみつつ

鷄を小舍におひこむ子ろのこゑ夕木枯のなかにきこゆる

二

貧農と呼ばれたる日のかなしみもすでに彼らにとほくなりたり

疎開者を蔑みすることのいよいよにあらはとなりて彼ら富みゆく

鷄卵も小豆も賣りていちにちの富にしなごむ
この老人(おいびと)は

境内に肥車さへゆかしめてこの社(やしろ)もあれは
じめたる

かほりよき煙草喫(の)みつつ日當りにこの青年は
製繩機踏む

子を二人戦死せしめし村長も追放すべき時と
やなりし

停電を合圖のごとくして眠りまたうたがはず
村落のひとらは

東京の物の相場を知りていふ老婆にすがるが
ごといふこゑ

どぶろくのわきばえなどを話題とす舊正月も
近きこの村落(むら)

芥

芥

ひと冬の芥集めて火を放つ寒さゆるびし日の
ゆふまぐれ

かさね着の裾も寒らに夜は聞きてラジオコメデ
ィーの笑ひもあへず

めばりして風ふせぐ部屋にみどりごを育くみ
し冬やうやく去らむ

春さきの曇れる土をゆきあゆみみごもる猫は
啼くこともなし

けさもわがこころいそぎて外字紙のきびしく
も鋭き批判を讀みつ

いく月の浮浪のはてを春の雪積むあかときに
死にゆきしはや

あきらかに苦惱にじめるわが貌とうべなふ夜
の鏡にむきて

胸せまく怒氣にみだれしその夜さへやさしく
いひし汝をしぬばな

寒き春

蠟燭も盡きたる夜(よは)の黑暗に立ちあがる牢獄の
ごとしといひて

百日咳も痲疹も流行る春さきのこの街を怖づ
わが幼子ゆゑに

花莖を伸ばしはじめし冬の菜にけさまた置きて霜はするどし

くらしむきの愚痴におちゆき煉炭の火鉢をかこむ集會果てぬ

白辛夷咲き光る庭のひそけくて麻疹を病むかこの家の子も

麻疹神送りし幣(しで)が吹がれゐて廢墟(あれあと)のみち春寒きかな

聖書賣るをらめが歌ふ讃美歌のこころがなしく春淺きみち

石獸(せきじう)の背に春日沁むはげしきもののなべてはとほきこの燒原よ

けふもわがこころ乾けば野の果に閃く雲に祈るごとくす

鮮冽にユニオンジャックはためけば眼もきびしこのきさらぎの丘

景物詩抄

L・S・E・の鐵扉をとざす音軋るゆふべの潮のとどろくなかに

春埃黄に流れゐる路の上靴工(くわこう)はひたぶるに獸皮をぞ削(そ)ぐ

グリーンの塗装なりたるキャバレイが逆光に
うかび夕寒き河岸(かし)

新しき都市構想を説く友とけふ佇つ潰(つひ)えたる
官邸のあと

無限軌道車が埃をまきて過ぎゆきぬ FOR SA-
GAMIHARA の道春寒く

アメリカの兵士らはいそぐ春雪（しゅんせつ）に濡るる鋪道
の夕づくころを

春雪をはだらにたもつ墓原がバラックのうら
に早や昏（く）れむとす

水上署の電燈ひとつかがやきて夕潮のうへに
靄しづまりぬ

生

獻立に豆腐もあればゆたかなる一日を經め春
の彼岸會

つまりたる家計のなかに花も買ひてほとけを
まつる春のいちにち

みどりごを間に据うる平衡のなかにし生きて
貧しきわれら

疫病のおそれにしづむこの街の夜に咲き光り
て辛夷の花群

夜のわがいのりひそかなるかもいにしへの奉
教人のいのりにも似て

たたへたる微笑のなかにまじまじとわれを見
守る異教の友は

疲れたる胸にあかりをともすごとにぎはしく
降りて温(ぬく)き夜の雨

いきほひ

街路樹の芽ぶかむとするいきほひの身にしひ
びかふ朝な夕なに

街なかの濠に鷗の來寄り啼く春時雨過ぎし朝
のひととき

都市計畫の標柱もすでに古びつつ春草は萌ゆ
この燒原に

砂とばし吹く風のなか思ひきり内閣をののし
るこゑはひびき來く

喇叭の音に從き歩みたる思ひ出もはるかにな
りて若草の路

廢墟の石も溫めば腰をおろしぼそぼそとなにか食む老ひとり

童女哀悼

春淺き茅生(ちふ)の野の邊に女童の葬りの列はゆきにけむかも

小川一雄に與へて

あどけなきいのちひとすぢに母を呼び父を呼びにけむそのいやはてに

まぼろしに童女はたちて笑ひしかあはれ月の
夜の辛夷花かげ

春曇とざして寒ききのふけふ喪にこもる汝の
たちゐ思ほゆ

上つ毛に七日七日の香をたく汝をおもへばわ
れも泣かゆに

表情

鞭をうくるごときおもひは生くる日のけふも
わが胸をいくたびか過ぐ

汚れたる記憶をたどるひとときの寒き表情を
なにかおほはむ

蝕みし腎をいだきてかの島にさまよひゐきと
のみを傳ふる

刺すごとき皮肉を吐きて經る日々よ友のいく
たりともすでにうとしも

林檎箱重ねし書棚の前に坐す怒らむとするこ
ころしづめて

その素性明らめがたきいくたりをまはりにも
ちて富みゆくらしも

亡國の羅沙うりびとの通るとき幼きわれら怖
ぢて目守りき

飽食ののちたちまちに妥協せしみぢめさよわ
が記憶にありて

花ひと日

海苔巻を花耀（て）る苑（その）に惜しみ食むけふのおごり
よ妻と子を率て

花耀りの子らの額（ぬか）にし映ゆるとき涙ぐましく
われとわが妻

乳をほるみどり子の聲明るくて花の影さす若
草のうへ

草に散る櫻の花を追ふ吾子よわれもおぼれて
春日照る苑

憑れたるもののごと坐(ゐ)る花のもと遠く進駐兵
の聲も聞えて

惜春吟

地下道を出で來てしばし夕光(ゆふかげ)の拓地に添へば麥の香ぞする

新しきランドセル負ふ幼らを朝々に目守る涙にじみて

いく組の相呼ばふこゑきこえゐてなまあたた
かき夜の苑のみち

異國兵しづかに去りて夕日いま墓の十字架（クルス）に
あかあかと沁む

屋臺店にたちまち醉ひてわが歩み暗き瓦礫の
みちにみだるる

砂白きプロムナードも丘に見ゆめぐらせる柵
に添ひあゆむとき

そのもてる嗜虐の性(さが)をあばきゆき行春の日の
公判終る

論じあひてけふの悔なしとたち別る星あかり
ある夜の歩道に

浮浪兒と女子警官と映されぬ背景にさくらの
花咲きみちて

花過ぎて南風(みなみ)あかるき港口よかの捕鯨船もや
がて歸らむ

鹵獲品の二十サンチ砲も除かれて礎石に明る
行春の日は

花束

花束をささぐる童と唱歌する童とけふし母を
讃へて
塗りかへし壁にあざやけく描ける文字婦人士
官らここに眠らむ

椎の花匂へば記憶よみがへるこの丘にありし
きみがアトリエ

水泡音（ラッセル）のきこゆるその身よそほひて寒き夜々（よひよひ）
街に佇つとふ

救世（ぐぜ）のねがひこの一期にし遂げしめといふこ
ゑは擴大されてきこゆる

たちまちに映畫となりて涙を呼ぶ浮浪兒がその母と會ひたることも

抑留の日々に覺えし灸術を汝はわが背に今夜こころむ

暗き季節

荷役ひと日就學ひと日のくるしみをつぶさに
告げてそのきよき眉

すがすがしき叫びにも似てきこゆれど暗きひ
びきをのこすそのこゑ

いくたびか爭論の座にすわりきてやうやくこころうごくことなし

拒みたるひとときのちに射たれきと夜（よは）の恐怖をけふもつたふる

給食の麵麭（パン）を手にする學童のその表情もひといろならず

のこされし軍事便に寄る感傷もあはくなりつ
つ時は過ぎゆく

もろともに死ななといひし日の記憶ある夜は
追ひぬ鼻じろむまで

青葉

注射熱頰(ほほ)にのぼれる幼子をかきいだきつつ若葉光(て)る窓

若葉をあらふけふのひと日の雨にして蛙のこゑすこの街なかに

風ひと夜雨ひと日とぞ過ぎゆきて青葉散りしくしづけき土よ

白けたる風塵の街に樂鳴ればしばしとまどふわが歩み來て

若葉冷え夜のコートに沁みくればとみに疲れてかへるこのみち

炎だち萌ゆる青葉にたぐふがに反撥し反撥し
ゆくわが感情は

夕潮のふくらみのぼる街川に早や映りつつ夜
の街の灯は

鐵はこぶ駄馬の毛並に汗は光りものたゆきか
な草生の靄は

世間譚

岩鹽のわづかばかりを土産とす二階の一間に
住む友がため

バラックに梱包を運びこむす早くて赤き長靴
をはく二三人

松根油をとる苦役にもしたがひしかのをとゞらも嫁ぎつらむか

償ひをもとめざるもの幼らをかなしむおもひのみと言ひ切る

赤銹びし自動車ボデーころがれば夜をここに來ていくたりねむる

爆風にこはれしままの窗寄りに幼らが九々を
學ぶこゑする

樂觀をすることとかなしみていふこゑと默し
つつわがためらふ前に

匪となりて生きてあらめと低くいふ陸の地圖
ある卓に寄りつつ

「挺身」の言葉いたましく身に迫る今夜白木の箱に問近く

苦しみつつ机の前にひと夜經しわれを呼ぶ幼子はすでに眼ざめて

卓のうへけさもあはれなり匙もちて馬糧にも似しかたまりを食む

夏菊

悼中山省三郎君

逝く春のひと日の窓にプーシキンを語りしき
みを永久(とは)にしぬばむ

夏菊の白きがつつむなきがらにまつはるごとく悲しみの樂

息ぎれのするときもこころはげましてきみは露西亞の文字にせまりき

世に出づるきみが譯書をたちまちに遺稿と呼びてこころ哭かゆる

筑紫なる葦平がこといふときに眼かがやきて
言ひしきみはや

あるじなき家をつつみてこの夜も寒くただよ
ふさみだれの雨

亡ききみの家に夜ふけて葦平も寒吉もあはれ
しづかに飯食む

琉球に求めたる碗をかいなでしほそきを指の
今も眼に見ゆ

百日紅の葉がひの空の星ひとつきみが瞳のご
と澄むもかなしも

夜景

一

倉庫河岸昏く梅雨降れり荷役了へていまかへ
りゆく少年の群

吐息にもみだれつつ夜(よは)の蠟は燃ゆ外(と)の黒暗に
音ひとつなく

乳にほふ幼子に來る蚊をうちて梅雨のあめ蒸すゆふべひととき

薄明のただよふ苑(その)よカイユ咲くほとりに口笛を吹く異國兵

地下驛の夜ふけの廊に煙草殼あさりつくせば彼ら消えゆく

時

廢墟（あれあと）のひと畝の麥も黄に照れば朝々にしてこころゆたけし

研究室におきふして朝夕（あさよ）炊ぐとぞその手を見しむ老教授きみは

かの獄にいのちたもちて日本の蛙のこゑを戀
ふとこそ聞け

硝煙のなかにいとなみし葬（さう）のさま閃きくれば
けふさへ辛し

紙屑のごとき讀本をかかへ持つ幼子たちよ扉（と）
もなき室に

獨逸語を學ぶ級（クラス）にひしめきし彼らいまはたな
にをして生く

中共の軍に投じきといふ説も絶望を傳ふるこ
ゑもかなしも

スクールバス丘の木立を縫ひゆくはかつて見
しわが風景にあらず

棺(ひつぎ)つくる家さへ建つとおどろきてけふあゆむ
崖下の燒跡のまち

髮斷ちてちかひたるかの女性らをくづしつつ
世は移らむとする

メガホンに錢乞ふこゑもいたいたし白衣よご
れたるこの病む人等

素描日々

ミシン踏む妻と疊はふ幼子とこの部屋にわが
けふの歌成る

餘儀なしといひて起ちたりはればれと對立に
入るものならなくに

土地をめぐるあらそひのなかに身をおけば今日も會ふ會ひたきもなき幾人に

花輪のかげに樂甲高くひびきつつ市場はまたここに開くる

三年經てマラリヤの熱にただよふをつねの生理のごとく彼は言ふ

讀み了へれば賣りにゆくをつねとしたる日も
若きいのちの誇を保ちき

疲れ果ててわがかへるときトタンなどの館ゐ
ゆくにほひ夜の土にあり

解しがたき一點に眞向きいふをとめつつまし
くして明らかにいふ

塵屑

逃れゆきじ峡(はざま)の町に求めたる煙管をけふも愛(かな)しみ持てり

かそかにも螢は峡にともしゐき無蓋貨車にてゆきしその夜

日本人ばなれのしたるその手口昨日(きそ)の夜は地
下の倉庫をおそひき

まつはれるいくつの悲話をつつむごと防塞の
あとに葛の葉は這ふ

爆煙のうするる空にゆがみつつ照りしその夜
の月も忘れず

公使館のあともあれたるままにして紫陽花は
咲くこの降る梅雨に

かの島の刑に死せりと傳ふれどそのいやはて
のおもひみがたし

海上

若狹小濱吟

逃げまどひつひにうたれし艦(ふね)のさまなまなま

とつたへこの濱人は

防壘のあとをおほへる夏草よ潮鳴る音のとほくひびきて

牡蠣殼の着きたる船の碎片をまじまじと見てけふ歩む磯

沈みたる艦のマストの海上にみゆるもかなし時は過ぎつつ

梅雨のあめ降る海上にとどろきて二十時過ぎの夜間飛行機

たくましくここにも育つ馬鈴薯か防波堤を越えて潮はしぶけど

人も人も魚をさげてバスを待つゆふべ梅雨降る磯街道に

沖の島に育ちたる小さき枇杷の實の酸ゆきを
食みてこのゆふべ經む

自家製鹽のけむりぞあがれやうやくに若狹の
濱に梅雨はれゆきて

おもひで

越中にて

過ぎにたるおもかげもてばのぼりきて越の海
見ゆる丘のひとときえ

この濱の小さき鹽田もあれはてぬ梅雨どきの
潮高くよせつつ

教會のステンドグラス夜のごとき感じに明り
梅雨そそぐ町

蜉蝣のかすかに飛びし記憶さへよみがへり來
てかの會ひし夜

葭切のあかときかけて啼くこゑにまつはるゝ
もかげをなほ戀ひやまず

梅雨雲の低く垂れこむる夜の沼に鰻をおそふ
舟はこぎゆく

箴言

箴言を額(ぬか)に刻みてけふも生くひじひしとこの
受刑のおもひ

しらしらしきその告白をききてゐつよりどこ
ろなきひとりぞ彼も

まじまじと焚書のほむら見て佇てりむなしく
白きそのほむらはや

躁狂のしぐさのなかにかぎりなき苦しみを祕
むと聞くもかなしも

傷痕にふるるごとくに思ひ出づ青々と莨麻の
しげりし夏よ

われを踏みわれを嚙みしてすぎゆきし影を追
ふつひに追はねばならぬ

バラックが狹むむしあつき道をゆき回想はか
の日の悲話にかかはる

捨てかねる未練をもちて言ふときにたちまち
つぶてはわが背をうつ

無恥を逐へ無恥を逐へといふこゑきこえ暗き
日はなほつづかむとする

内なる光(インナーライト)をもたぬ民よとあはれみしかのメッ
セーヂをけふも胸にす

怒り

遮斷機に堰かれゐるゆふべの群衆よなべて怒りもつごとき貌して

時々に立場をうつし說くことを處生のすべとしつつ彼らあり

焼跡にとりし小粒の馬鈴薯を朝々に食む沁む
おもひにて

夕潮が河岸（かし）にあげくる塵芥をいくたりか來て
あらそひうばふ

いつはりの涙垂りつつ馴寄（なよ）りゆくを彼のをと
めのみと誰かいはむや

まざまざとさらされしいつはりの前にたつカリカチユールを見るおもひにて

身におどむ滓のごときをはかなめど言（こと）にもいはず時は過ぎゆく

死火山のごとくひそまるいくたりをしづかにぞおもへ二年（ふたとせ）を經て

冢

一瞬にかの日ほろびし靈を呼ぶ夏草小野の冢（つか）
にせまりて

過ぎし日のあはれを呼ばふごとくにも晝の蟲
鳴く小（さ）冢（づか）の草に

膝かたく坐る今夜の集りよ炎にうしなひしき
みをしぬびて

よごれたる手をこまぬきて喪失のおもひのな
かにただよひし日よ

さやかにも月はのぼりぬ草ごもる悲しき冢を
こよひ思はむ

這ふごとく爆煙のなかのがれたる記憶を呼び
てこの幼らも

玉蜀黍の葉を擦る夜の暑き風はぐくまむ夢の
ひとつだになし

機關區

クレーンのうなり鐵板をたたく音レール幾條
を踏みつつ來れば

油染む作業衣のきみはみちびきて操車のさま
をわれに見しむる

炎天のひかりをあつめつつ移動するうづ高く
石炭をつみしクレーン

火を浴びし車輛いくつの日に曝れてむせぶばかりに鐵匂ふ地區

突放の貨車しづまれば甲高きこゑひびくその貨車の中より

車輛とともにあり經しきみが二十年節だつ手
さへ涙ぐましく

無事故表彰狀いくつかかげたる室の外機關車
いくつくろぐろと並む

乘務了へし車掌のきみら鍬もちて陸稻の育つ
丘をのぼりゆく

機關區の煤によごれたる卓のうへゆたかに山
百合の花活けられて

スノーセットにからむ夏草裏山より耋ひぐら
しのこゑなだれつつ

飯盒より無雜作に飯を食み了へれば少年は信
號旗をもちて出でゆく

いたいたしき女子職員の殉職を錄すいしぶみよ夏草のなか

短歌のこと俳句のことにもふれゆきてこの機關區の組合文化の會

辨當がらを枕にしきてはやねむる徹夜業務を了へ來しいくたり

新しき都市構想をききつつ佇つ復興成りし跨
線橋のうへに

つぎつぎと夜の乗務にたちゆきて詰所にくら
き電燈灯(とも)る

炎天

饑ゑざらむねがひもむなしと思ふ日をあかあかとしてカンナは咲けり

紫陽花の咲きゐし門がまぼろしにいまも見ゆ瓦礫をふみつつ佇てば

蠅のうなるなかに鮫などを切りてをり葭簀ひとつに西日をさけて

貸ボートこはれしままに伏せられぬ埃づきたる青萱の岸

いまもまた牽引車轟然とすぎゆきて砂塵の底の低き家並

夏深くなりし草生にわがおもふソ聯の土となりたる汝を

髪の毛を染めて若きらにまじらへる嘆きをきみはひとに傳へず

燒跡に蜻蛉を捕るとけふもゆくたたかひの記憶なき幼子よ

二年は過ぎぬ

動悸して進駐の軍のとどろきを目守りし記憶
のよみがへるとき

ありありと畏怖をやどせるその貌のいまも眼
にありありふたとせを經て

悔いふかくふたとせ經つとかへりみむ蟲なき
そめし夏草原に

追憶はかすかにかの日の怖れを呼ぶ蠟灯(とも)す暑
き夜のふくるころ

鏡面に月のひかりの來てあれば眼ざめし夜(よは)の
しばしすがしも

斷章

怒りすら微笑のなかに閉ぢこめて迫りくる老
猾をいまこそは衝け

ささやきのなかより生れくるものの暗きうご
きにいどまむとする

ペシミズムにまたおちてゆく結論にあらがひ
て夜の椅子をたちあがる

誰もみな安煙草にて染りたる指してこの編
輯の卓

けふ來れば家鴨を飼へりボート小屋こはれし
壁に金網張りて

學問を捨てて企業にゆきしこと富みたればま
た友は嘆かず

熱き風地ひくく吹けり脂多き煙草に咽喉をい
ためゐる夜

かるがると思ひをひらき毬のごとをとめはは
ずむけふ集ひ來て

陸稻の花もいまはすぎしよと夜のひかり濡るるがごとき丘を下りぬ

木星は雨はれし夜の空に冴ゆいちはやき秋の幸(さち)のごとくに

卷後小記

昭和二十一年の秋から二十三年の夏までの約十ヶ月間の制作を集めてこの小集を編む。前著「流砂」（青磁社版）につゞく終戰後の第二集である。

この期間私は新しい日本に生きるものゝ一人としての自らに對してきびしい自己批判をつゞけて來た。

つねに眼は明るい方向に据ゑて來たのであるが、懷疑・動搖・苦悶のなかに漂つてゐた事實はおほふすべもない。しかしかうしたところを經て貧しく弱々しい主體は漸次强

くなつて行かうとしてゐることもまたたしかである。この集の歌はそのやうな蕩搖の中から生れたものである。いはゞ古い自分といふものとのたゝかひの記録だ。きびしい現實との對決なくして歌を生かしてゆく道はもうないだらう。そしてその對決にまで自らを驅りたてるべき主體の確立なくして歌人といふものはもう成りたたないであらう。行路はいよいよ險阻である。

ともあれ作家はその作品によつて自らを語らしめればよい。これ以上自己辯護も自作說明も加へることはない。

日本文化の傳統の反省といふことが大きく取り上げられ、その線の上に於いて短歌の運命が論じられたのもこの

期間であつたことを附記しておく。

昭和二十二年九月盡

著者識

冬暦

昭和廿三年七月廿五日 印刷
昭和廿三年七月卅一日 發行

定價 百參拾圓

著者 木俣修

發行者 中村梧一郎

印刷者 小坂孟
大日本印刷株式會社
東京都新宿區市谷加賀町一ノ一二

發行所 株式會社 八雲書店
東京都文京區森川町一一一
電話小石川(85)二四〇七番 一八五二番
振替東京二一一二番

鈴木製本

配給元 日本出版配給株式會社